

聖書:ホセア書2章14～23節

説教:あなたはわたしの民

はじめに

ホセア書が続けて見てまいります。ホセアは紀元前760年頃に北イスラエルで預言者として召され、30年以上にわたって活動したと言われます。当時の北イスラエルは、異教の神であるバアルを礼拝していたばかりではなく、道徳的にも乱れ、正義がねじ曲げられていくような時代でした。そのことを象徴する一つの事件が起きました。当時の王であったアハブが、信仰者であったナボテの畑を手に入れるために、偽りの証言をさせて、合法的にナボテを殺したナボテの畑事件と呼ばれるものです。人々はそれを見ても「そんなことをしてはいけない」と言って非難するどころか、王に協力してナボテ殺しに手を貸していく。だれが見てもひどい話ですが、そんなことが平気で行われていました。

いまはどうでしょうか。もうナボテのようなことは起きないと言えるのか。決してそんなことはない。戦争やテロのニュースを見るたびに、何も変わっていないのではないかと思うのです。神は何をしておられるのでしょうか。ただ手をこまねいて見ているばかりなのか。聖書は何を語っているのか。ともに見てまいります。

1 神のさばき

1) アコルの谷: 聖絶のものをかすめ取ったアカン

14, 15節。「それゆえ、見よ、わたしは彼女を誘い、荒野に連れて行って 優しく彼女に語ろう。わたしはそこを彼女のためにぶどう畑にし、アコルの谷を望みの門とする。その場所で彼女は答える。若いころのように、エジプトの地から上って来たときのように。」

ここに出てくるアコルの谷とはなにか。詳しくはヨシュア記7章に書かれています。モーセの跡を継いだヨシュアがエリコの町を攻め落とそうとしたときのことです。最初の六日間は声を出さずに町の周りを回り、七日目になったとき、角笛を吹き鳴らすと城壁が崩れ落ちた。この話は有名です。そのときヨシュアはこう命じていました。「エリコの町にあるものはたとえ高価なものであっても絶対に持ち帰ってはならない。」ところがアカンという人物が、金や銀の延べ棒と服をこっそりと持ち帰ってしまいます。それだけならだれも気がつかずに終わったかもしれない。ところが、イスラエル

が戦いに負けて大損害が出でしまった。戦争に負けた原因はイスラエルの罪にあるとヨシュアは見抜き、調査を始める。その結果、アカンの罪が明らかになり、彼が盗んだものと彼の財産をアコルの谷に運んで焼き払い、石で打ち殺したという事件でした。このように「アコルの谷」は、いまわしい罪の代名詞として記憶されていました。

2) 神の御声に聞き従うのか (申命記28章)

先週も触れたことでしたが、申命記28章で神はモーセを通して祝福とのろいについてこう語っていました。まず祝福についてはこうでした。「もし神、主の御声に聞き従い、主のすべての命令を守るなら、あなたは町にあっても祝福され、野にあっても祝福される。」次にのろいについて。「もし神、主の御声に聞き従わず、主のすべての命令と掟を守り行わないなら、あなたがたは町にあってものろわれ、野にあってものろわれる。」

アコルの谷事件のことで言えば、アカンというひとりの人が犯した罪がイスラエル全体にまで及び、まったく関係のない人たちを巻き添えにして死んでいった。神のみことばに従うのか従わないのかということは、ひとりの話でおさまらないのです。ときには国の存亡にさえ関わることにもなりかねないのです。

2 人の罪

1) どこに解決があるのか

アカンの話は、けっして他人事ではありません。神の基準によれば、すべての人が罪人なのだと聖書は断言します。「アコルの谷」は、イスラエルにとって暗闇に葬ったままにしたい名前でした。同じように、だれにも思い出したくない「アコルの谷」があるのではないですか。これをたとえば生ゴミとよく似ている。ゴミの日に出すのが面倒だからと言って押し入れにしまい込んだらどうなるか。いやなものが目に見えなくなったので一時は平安かもしれませんが、やがてひどい匂いがしてきます。罪も同じです。闇に隠したまましていると、どこからか匂いがしてくる。芳香剤を買ってその場しのぎをする。そんなふうにごまかしながら生きています。神のみことばに聞き従わなかった者は、このようにしてのろいを受けてしまいました。どうしたらよいのでしょうか。「アコルの谷」で失

敗したのだから、この問題を解決するためには、まったく違う場所を探さなければならないということでしょうか。

2) アコルの谷を望みの門とする

そうではありません。神は15節でこう言われる。「わたしはそこを彼女のためにぶどう畑にし、アコルの谷を望みの門とする。」思い出したくもないアコルの谷こそが、希望のスタート地点だと言うのです。

どういうことでしょうか。たとえば、けんかしていた人と和解をしたいというとき、日本の文化ならこんなふうに言うでしょう。「これまでのことは水に流して、もう一度仲良くやりましょう。」気まずいことや不都合なことは水に流してなかったことにし、まっさらなところから再スタートすればよいと考える。

ところが聖書はまったく違う。アコルの谷のことは忘れて水に流しましょう、ではない。むしろ反対です。アコルの谷であなたがたは何をしたのか。その罪をしっかりと覚えていなさい。そこが望みの出発地点となるというのです。

3 あわれむ

1) なぜさばきのことばを語るのか

思い出したくもないいやな場所が、どうして希望の場所になるのでしょうか。生ゴミのたとえで考えてみればわかる。もし日本式に、「すべて水に流す」と言ったとしましょう。それで生ゴミはなくなりますか。いいえ、そのままです。「水に流す」「見ないことにします」と言うのは簡単ですが、いつかはひどい匂いがしてきます。結局、問題は解決されないままです。

どうして神は、厳しいと思えるようなさばきのことばを語るのか。できれば聞きたくないと、だれもが思います。けれども、もし神がさばきのことばを語らなかったなら、隠してしまった生ゴミのことをどうやって思い出すのでしょうか。神のさばきのことばがあるから、そうだあそこに生ゴミを隠したままだったと気がつく。そうしたらだれもが思う。このままではいけない。私には救いが必要だと自覚されていく。

2) 契りを結ぶ

では、どのようにして神は私たちを罪から救うのでしょうか。今日の箇所の特徴的なことばが繰り返されています。19、20節です「わたしは永遠に、あなたと契りを結ぶ。義とさばきと、恵みとあわ

れみをもって、あなたと契りを結ぶ。真実をもって、あなたと契りを結ぶ。このとき、あなたは主を知る。」「契りを結ぶ」ということばが三回繰り返されています。今はこのような言い方はあまりなくなりました。「婚約する」という意味です。聖書の時代、夫となる人が相手の女性と結婚しようというとき、女性の家に対して花嫁料を払うという習慣がありました。日本にも、婚約するときに結納金を贈るという習慣がありますが、それと似ている。

ということはどうなるか。この場合、神が夫の立場で私たちが花嫁という立場になります。「契りを結ぶ」と言うからには、神のほうから私たちに花嫁料を支払いますということになる。

その花嫁料をどうやって支払うのか。そのことを見ていく前に、契りを結んだ結果、何が起こるのかを先に確認します。アコルの谷が望みの門となるとあります。加えて21、22節にもこうある。

「その日、わたしは応えて言う。——主のことば——わたしは天に応え、天は地に応え、地は、穀物と新しいぶどう酒と油に応え、それらはイズレエルに応える。」

先ほど挙げた申命記28章の祝福が思い出されます。神と契りを結ぶことができたなら、神は天から雨を降らせ、豊かな収穫を与えてくださる。再びもとのように回復してくださるというのです。ここで出てくるイズレエルとは、最初に触れましたあのナボテの畑事件が起きた町の名前です。アコルの谷と同じように、罪の象徴であるイズレエルが、いまや祝福の町に変えられていくというのです。

3) 代価を払う

では先ほどわきに置いていた花嫁料はどうやって支払うのか。そのことを最後に確認します。神であるから、そのようなものは必要ないということでしょうか。あるいは、天から雨を降らせるからそれで十分だと言うのでしょうか。でも、神のみことばに逆らい、罪を重ねてきた花嫁です。その罪はどうなるのでしょうか。「水に流します」とはならないことは先ほども言ったとおりです。さばきのことばを聞いて、罪を思い起こすしかありません。その罪はどうなるのか。

契りを結ぶという意味の深さを考えます。神は、罪のある花嫁をそのまま迎えるはることはありません。神はきよい方です。花嫁もきよくならなければならない。だれがきよめるのでしょうか。神がきよめてくださいます。どのようにしてでしょう。神のひとり子である方を十字架において身代わりに

なつてさばきを受けられ、贖いの代価を払ってくださいました。それが花嫁料でした。そのようにして「神の民」と呼ばれる資格のない者でありながら「あなたはわたしの民」と呼んでくださいます。

神はこの罪の世をご覧になって、なにもしていないのではない。むしろご自分の御子を差し出して花嫁料を払い、私たちをもう一度花嫁として迎えようとしておられるます。神がどれほどに私たちを愛しておられるのか、そのことを思い起こしつつ、また歩んでまいります。